

# 万葉集長歌における題詞と枕詞

——枕詞の抽出的機能について——

松 田 芳 昭

万葉の歌人たちに、枕詞がどのようなはたらきを持つものとして自覚され、また使用されていたか、このことについてさきに筆者は、主として長歌における枕詞の一首内での布置構造を手がかりとして、あきらめようとしたことがあった（万葉集長歌における枕詞の位相と機能、「国文学攷」二十三号所収）。本稿もまた、前と同一主題を、しかしべつの角度から考察しようと試みたものである。べつの角度というのは、作品に付されている題詞を手がかりとすることである。なお考察の対象を長歌にかぎったのは、短歌にくらべてそれが、枕詞の駆使されるより豊富な場をもっていたと考えられるからである。

## 一 題詞と作品との関連性

題詞には、作歌者みずからによって設けられたと思われるものもあるが、また、その作品の筆録者、もしくは編者によって、後か

ら設けられたものもあったりして、その判別を、題詞のすべてにわたって行なうことはむずかしい。このことは、序などが、おおむね作歌者の手になることがはっきりしているのと大きなちがいで言わなければならない。ところで、枕詞はもとより作歌のなかだけに現われるものであり、それを右の如き性格をもっている題詞とかわわらせることによって、枕詞の使用意識を究明しようとすることには、いくらかのあいまいさを伴うことをまぬがれ得ない。厳密には、作歌者自身による題詞にはじめて、作歌と題詞との関連性は直接的となり、したがって、題詞と作歌中の枕詞との関連も直接的なものとなり、枕詞の使用意識もそこからいつそうはつきりしたものとして把握できるはずである。しかしそれを望むことはきわめて困難であるから、多少のあいまいさが残り間接的になるにせよ、それでも作歌者、筆録者、編者などをふくめた万葉人たちの対枕詞意識というものを、さぐり出すことはできようと思ふのである。

題詞の記述の仕方には、およそつぎのような幾種類かの類型が認

められるようである。

### △第一の類型▽

これはたとえば、「天皇御製歌」(巻一、一)、「額田王の歌」(巻一、八)などのように、作者名だけが示されるものである(以下引用の題詞と歌はすべて「日本古典文学大系」による)。ただし、「また家持の作る歌」(巻三、四六六)のような場合は、一見作者名が示されているだけのようであるが、「また」とあり、それは、それより前に、「十一年己卯夏六月、大伴宿禰家持、亡りし妾を悲傷ひて作る歌」(巻三、四六二)とある題詞をうけたものと考えられるから、後に述べるべつの類型に属すべきものと考える。また、「山部宿禰赤人の作る歌」(巻六、九二三)は、その直前に、「神龜二年乙丑夏五月、吉野の離宮に幸しし時に、笠朝臣金村の作る歌」(巻六、九二〇)と関連すること左注によって知られるが、行幸の年次は両者異なっていたとしても、すくなくとも吉野從駕作であったことにおいて共通しており、金村の題詞の一部は、この赤人作にまで及ぶものと考えられるから、このような場合も第一の類型には属しないと見るべきであらう。かような例はほかにもかざえることができる。

### △第二の類型▽

これは、贈答あるいは応詔の歌であって、題詞に相手名が示される。この種のもは、短歌に相当数が認められるけれども、長歌の場合は、「詔に応へむが為に儲けて作る歌」(巻十九、四二六六)など僅少にとどまる。

### △第三の類型▽

これは、作歌の題材や、制作の時、場所、その他が示されるもの

である。「河内の大橋を独り去く娘子を見る歌」(巻九、一七四二)は題材を示し、「難波の宮にして作る歌」(巻六、一〇六二)は場所を示し、「春の日に三香の原の荒れたる壺を悲しび傷みて作る歌」(巻六、一〇五九)は、時と場所もしくは題材を示し、「四年丁卯春正月、諸王諸臣子等に勅して、授刀寮に散禁せしむる時に、作る歌」(巻六、九四八)は、時その他を示している。なおこの類型は、第一の類型をもあわせふくんでいる場合もある。つまり題材などが示されると共に、作者名が示されているものである。

以上の三類型の題詞のうちで、枕詞との関係が生ずるのは、主として第三の類型である。もともと、第二の類型のうちにもまれに關係をもつものがある。「柿本朝臣入厩新田部皇子に献る歌」という題詞は第二の類型に属するが、その長歌には、「ヤスミシン わど大王 タカテラス 日の皇子栄えます 大殿のうへに(下略)」(巻三、二六一)とあって、新田部皇子を讀えて枕詞を用いている。しかし關係の主力は何といつても第三の類型にある。それは題詞が作歌の題材内容にもつばら関しているからに外ならない。そこで、この第三の類型の題詞を作歌とのかかり合いにおいてこまかく見ていくときどうなるか。それぞれ少しずつ性格を異にする幾つかの实例について考えてみよう。これはいわば、題詞が内包している性格の問題である。

### △桜の花の歌

#### ○桜の花の歌

嬖子らの 挿頭のために 遊士の 綬のためと 敷き坐せる  
國のはたてに 咲きにける 桜の花の にほひはもあなに

(巻八、一四二九)

この歌の主題が、桜の花をたたえるところにあることはあきらかである。したがって題詞にただ「桜の花」とあるのは、一首の主題を示したことはない。しかしそれは、主題の構成をうながすいちげん重要な中心核なのである。つまり「桜の花」という題詞は、一首のかなめとなるものをそのままあらわしていることとなる。集中ことに短歌に多くあらわれる「○○を詠む」といった形式の題詞では、「○○」はたいがいこのような性格をもっているといつてよい。

#### △性格の二―発想契機の提示▽

##### ○草香山の歌

オシテル 難波を過ぎて ウチナビク 草香の山を 夕暮に  
わが越え来れば 山も狭に 咲ける馬酔木の にくからぬ君を  
何時しか 往きてはや見む (巻八、一四二八。かたかなは枕詞  
を示す以下同断)

この歌の中心となる部分は、「私注」に、「『咲ける馬酔木のにくからぬ』の序のつづきの所が作の中心をなして居る」(八巻、一二頁)と言われる加くである。したがってまた、「寄物陳思に願すべき相聞の民謡が、あしびの花によって春雑歌に分類され」と言われるのも自然である。そこで「私注」が、「題詞の如きは寧ろ編者の附したものと見られる」という意見は、歌の中心があしびの花にあるのに、題詞には「草香山」となっているのが、歌の作意からみてふさわしくないという考え方によるものと察せられる。題詞が編者によって付されたものであるとしても、しかし何ゆえに草香山としたのであろうか。これを解く手がかりとして、やはり「私注」の「此一首は特定の作者を定め難い民謡なのであらう」とか、「民

謡の特徴を備へて居る」とかいうことが注意される。言うならばこの歌は、草香山を発生の場としてうたわれた民謡であったのであろう。古事記にも、「日下の直越の道」とあるように、奈良と難波を結ぶ交通では、草香の峠を越えるのが近道であったが、「道が峻峻なので」(「全註釈」六巻二二頁)南方に回って菟田越えをすることのほうが多かったと思われる。それだけに草香山を越える時の感慨は深かったであらう。この歌の場合、その主想部とも言うべき「にくからぬ君を何時しか往きてはや見む」も、そのような感慨の表現とみることができよう。「草香山を越ゆる時に」神社忌寸老鷹が詠んだという一首、「直越のこの道にしてオシテルヤ難波の海と名づけけらしも―巻六、九七七」の場合も、武田博士がそのオシテルヤについて、「この枕詞は、大和人が難波の海の光り輝くを見、それを賞美する感情をもって云い始めたのだらう」(「全註釈」六巻一二三頁)と解されるように、山越しの際の独特な感慨を表現したものとと言える。いったいに、峠の人生における意味にはかりせめならぬものがあったこと、万葉歌はもとより、種々の民俗的行事などによってあきらかである。そうして、峠とはかぎりず港津、渡船場などの交通の要衝、あるいは難所等は、民謡発生の有力な地盤でもあったのである。してみれば、題詞に「草香山」とあるものも、歌の主想部がもとと草香山を地盤とした契機とした発想であったがゆえ、また草香山にまつわる民謡であったがゆえにはかならないと言わなければならない。もしそうならば、題詞はこのままこの歌にふさわしいものであったとしていいであらう。ともかくこのような題詞は、歌の内裏面におけるかなめを提示したものではないとしても、一首の成り立ちにはたらく、風土的にもしくは方处的とも言

える契機を提示したものとすることができらるであらう。一般に、「○○国の歌」という形式の題詞にもこのような傾向が認められるようである。

また、方处的契機に対して時間的歴史的契機を示すと思われる題詞がある。

○近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣入麿の作る歌

(上略) 天皇の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の 霧れる モモシキノ 大宮処 見れば悲しも(巻一、二九)

歌の主旨部はここにあげた部分にあるが、なかでも終末部の、「モモシキノ大宮処見れば悲しも」がそうである。しかしそれは、「近江の荒れたる都を過ぐる時」という時間的契機に触発されてはじめて発想されるものであった。一般に、「○○○○時」という形式の題詞には、このような性格を認めることができると思う。

▲性格の三主題の提示▼

○三香の原の新しき都を讀むる歌

山背の 久邇の都は 春されば 花咲きををり 秋されば 黄葉にほひ 帯ばせる 泉の川の 上つ瀬に 打橋わたし 淀瀬には 浮橋渡し あり通ひ 仕へまつらむ 万代までに(巻十七、三九〇七)

この題詞の特徴は、たとえば、「吉野の宮に幸しし時、柿本朝臣入麿の作る歌」(巻一、三六)という題詞を付した長歌が、「水激つ滝の都は見れど飽かぬかも」と吉野の宮居をたたえることを主題にしたものであるにかかわらず、その主題を題詞のうちに示していない例とくらべて、いっそうはっきりする。一首の主題を題詞が提示

する例としては、ほかにたとえば、「死にし妻を悲しひ傷む歌」(巻十九、四二三六)、「忽に枉疾に沈み、殆に泉路に臨む。よりて歌詞を作りて、悲緒を申ふる一首」(巻十七、三九六二)、「京に入らむとき漸く近づき、悲情撥き難く、懐を述ぶる一首」(巻十七、四〇〇六)、「陸奥国より金を出せる詔書を賀く歌」(巻十八、四〇九四)など多くをあげることができる。

▲性格の四外的要因の提示▼

例は短歌の場合であるが、題詞にはまれにつきのようなものがある。

○仏前の唱歌(巻八、一五九四)

○尼の、頭句を作り、大伴宿禰家持の、尼に誂へらえて末句を續ぎて和ふる歌(巻八、一六三五)

前者は、法会の音楽にあわせて合唱した歌であることを示し、後者は、作歌技法上の特異な方法を説明したものであって、これらは、これまで述べて来た三つの性格とは別様のおもむきを持っており、いわば前三者が、作歌そのものの内実面にかかわるとすれば、これは、作歌の外的形式面にかかわるとも言えるし、あるいは作歌の外的要因を示したものとと言ってもよい。このような題詞には、「左注」の性格に類するところがある。題詞と左注とをくらべてみると、題詞が作品形象化への内的要因を示すことが多いのに反して、左注の場合、總じて編集意識にかかわるものが多い。出典や異伝の提示、作歌年次の考定、伝承過程の説明、作歌にまつわる挿話や因縁談、編集の手順などが記される。要するに作歌に関連した外的要因が示されることが多いのである。したがって題詞のほうが、作品との間に、直接的内面的な脈絡を通じていると言うことができ

よう。

以上、題詞の性格を四点にわたって指摘したのであるが、最後の一点は除くとして、他の三点はいづれも作品の内実にあつては、左に数例をかかげることにする。（引用は岩波書店刊「中国詩人選集」による）。

なお、枕詞とは関係のないことであるが、中国の古い詩にあつても、詩中における題詞の意味の重さを暗示するものがあるの、左に数例をかかげることにする。（引用は岩波書店刊「中国詩人選集」による）。

○江南にて、李龜年に逢う 杜甫

岐王の宅裏 尋常に見し

崔九の堂前 幾年か聞きし

正に是れ 江南の好風景

落花の時節 又た君に逢う

題詞に言う「江南」は、詩中に、「正是江南好風景」として力説される。おなじく、「逢李龜年」は詩中、「又逢君」とある（圈点筆者）。この「又」について「杜詩偶評」には、「凄婉なること、全く一の又の字に在り」（「中国詩人選集」九卷、二〇五頁）と評されている。それは、「正是」からひきつづいて作品の高鳴りかなでるところと言えよう。つまり題詞の意が、詩中ではもっとも強い詠嘆的表現を生んでいるということになる。

○木瓜山を望む 李白

早く起きて 日の出づるを見

暮に棲鳥の還るを見る

客心 自のずから酸楚

況んや木瓜山に対するをや（圈点筆者）

○怨情 李白

美人 珠簾を捲き

深く坐して 蛾眉を望む

但見る 涙痕の湿りを

知らず 心に誰を恨むかを（圈点筆者）

○宣城にて杜鵑の花を見る 李白

蜀国曾って聞く 子規の鳥

宣城還た見る 杜鵑の花

一叫一廻腸一斷

三春三月三巴を憶う（圈点筆者）

右の三例中とくに前二者は、「况对木瓜山」と言い、「不知心恨誰」と言い、それぞれ題詞の意の強意的あるいは強勢的表現となっていることが注目される。

このようにして題詞の価値は、重要な点でその作品の内実と関連しているところにあり、時に作品の内実、何よりもまずその題詞に表現され、題詞は、作品内実の徴候となる場合さえあると言わなければならない。ところで、このように作品と相わたる題詞は、枕詞とどのような関連を持つのか、つぎにその具体相についてみてみよう。けっきよよくそのことよって予想されることは、枕詞の強意的ないし強勢的、もしくは抽出的機能のことではなければならない。

## 二 題詞と枕詞との関連性

題詞と枕詞との関連の仕方には、いくつか形式が認められるようである。

△第一の形式▽

さいしよに注目されるのは、題詞を構成している語のなかのある語が、そのまま作品のなかに現われて枕詞を伴なう場合のあることである。このような関連の仕方の形式を第一の形式と称することにする。

○筑波嶺に登りて嬉歌会をする日に作る歌

ワシハスム、筑波の山の裳羽服津の その津の上に(下略)

一巻九、一七五九

題詞の「筑波」は、歌では、「ワシノスム筑波」と枕詞を伴って表現されている。筑波嶺は、「常陸国風土記」にも、「それ筑波岳は、高く雲に秀で、最頂は西の峯聳しく峻く、雄の神と謂ひて登臨らしめず」とも、「筑波峯の会に娉の財を得ざれば、兎女とせずといへり」とも言われるほどいわれの深い高名の山であった。おそらくこのような背景が作歌者の心理にはたらいて、枕詞の使用となつたのではないかと思われるが、題詞のがわから言えは、それだけ一首の中核をこの語が示しているということになる。十九句から成る長歌であるが、枕詞が現われるのはこの一回だけであることを考えると、ここにはとくに筑波山だけを抽出して、その意味と声調を強めるはたらきを、枕詞が果そうとしているのではなからうか。

長歌の一首のうちで、ただ一回だけ現われる枕詞が、しかも題詞の語に用いられる例はいくつかあるが、さらに二例をかかげてみよう。

○二上山の賦

射水川 い行き廻れる カマクシガ、二上山は 春花の 咲け

る盛りに 秋の葉の にはへる時に(以下二十一句略)一巻十七、

三九八五

一首は一語の例外もないほど二上山を嘆賞する語で貫かれていゝる。二上山が一首のすべてなのである。ただ一回の枕詞が、まさにそのような「二上山」だけに使用されているわけで、ここにも枕詞の抽出の機能をみることができようと思う。

○天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の

防人等の歌

足柄の み坂たまはり 願みず 吾は越え行く 荒し男も 立  
しや憚る 不破の関 越えて吾は行く ムマノツメ、筑紫の崎  
に 留り居て 吾は齋はむ 諸は 幸くと申す 帰り来までに

(巻二十、四三七二)

題詞に言う「筑紫」は、防人となつていで立たねばならない東国農民たちにとって、西方はるかな未知の国であり、特異な心情で受けとられていたにちがいない。一首中一回の枕詞は、まさにそのような「筑紫」を、全体のなかから抽出して表現しようとしている。つぎの例は、題詞の二語のうちその一語について枕詞が二回、他の一語について一回用いられたものである。数例があるが、一例だけを示そう。

○長皇子ヲ獵路の池に遊しし時、柿本朝臣入麿の作る歌  
ヤスミシシ、わご大王、カカテラス、わが日の皇子の 馬並め  
てみ獵立たせる ワカコモヲ、獵路の小野に 猪鹿こそばい  
備ひ廻ほれ(下略)一巻三、二二九九

ついでながら、題詞と枕詞との関係から推定するのには、「大伴坂上郎女の、跡見田庄にして作る歌」と題詞した短歌、「イモガメヲ始見の崎の秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ」(巻八、一五六〇)の「始見」は、「跡見」ではないかと思う。「始見」については、

今所在不明と言われているが、ハツミとよむ説、ミソメとよむ説、始見の誤りとしてハツセとする説、跡見の誤りとしてトミとする説などあって一定しない。題詞に現われる地名が、歌中において枕詞を伴う諸例から察すると、みだりに誤字説にしたがうのはつつしむべきとしても、この際は「跡見」の誤字説によるべきではないかも考えられる。

#### △第二の形式V

題詞のなかのある語の代わりとなるような同義の語、もしくは、同義の語ではないが題詞の語の意味に深いかかりを持つ語など、いわば題詞のなかのある語に準ずる語（以下便宜上「準題詞の語」とよぶ）に、枕詞を伴う場合がある。これを第二の形式と称しておこう。

#### ○布勢の水海に遊覧する賦

（上略）布勢の海に 船浮け揺ゑて 沖へ漕ぎ 辺に漕ぎ見れば 落には あぢ群騒ぎ 島廻には 木末花咲き 許多も見の清けきか タマクシゲ 二上山に ハフツタノ 行きは別れず（下略）—巻十七、三九九—

歌中の「二上山」は、題詞の「布勢」ともちろん同義の語ではないが、それでも布勢に深いかかりを持つ語と言える。布勢の海は二上山の北方に位置しており、二上山は布勢の水海の一円にふくまれる。「布勢の海」が枕詞を伴わないかわり、それと関連した「二上山」が枕詞によって抽出されて来ている。

ところで、一首中一度しか枕詞の出でこないような場合にも、しばしばこの形式で枕詞が現われる。

#### ○熊登国の歌

ハシタテノ 熊来のやらに 新羅斧 落し入れわし 懸けて懸けて 勿泣かしそね 浮き出づるやと 見むわし（巻十六、三八七八）  
「熊登国の歌」と題する所以は、その国に行われている民謡の意であらう（「全註釈」十一巻三一七頁）と言われるが、おそらくこの歌の発想の場が、熊来であったのではなからうか。もしそうならば、ハシタテノは、民謡発想の方处的契機となるものをとくに抽出して来ているものと考えられる。

#### ○七夕の歌

ヒサカタノ 天の河に 上つ瀨に 珠橋渡し 下つ瀨に 船浮け 居ゑ 雨降りて 風吹かずとも 風吹きて 雨降らずとも 裳濡らさず 止まず来ませと 玉橋わたす（巻九、一七六四）  
題詞の「七夕」は、歌のなかでは「天の河」という「七夕」ときわめて類縁性の深い語であらわされ、それがヒサカタノによって抽出される。

○吉備の津の妾女の死し時、柿本朝臣人麿の作る歌  
アキヤマノ したへる妹 ナヨタケノ とをよる子らは いかさまに 思ひをれか（下略）巻二、二二七

「妹」といい「子」というのも、題詞の「妾女」を二様の仕方であらえた準題詞の語であって、これにそれぞれの枕詞が連続的に伴うことによって「妾女」を抽出してくる。

○十六年甲申春二月、安積皇子の薨りましし時、内舎人大伴宿禰家持の作る歌

（上略）大日本 久迥の京は ウチナビク 春さりぬれば 山辺には 花咲きををり（中略）和豆香山 御興立たして ヒサ

か、た、ハ。天。知。ら。し。ぬ。れ。こいまろび いづち泣けども せむすべも無し(卷三、四七五)

これは、「天知らしぬれ」が、題詞の「暮りましし」と同義の語とみることが出来る。一首中枕詞は二例しか現われないが、その二例はともに、題詞の二語に、一つは第一の形式で一つは第二の形式で使用されていて、それぞれ題詞の示す時間的契機に關している。

### △第三の形式▽

第一の形式と第二の形式は、いずれも題詞のなかのある語、もしくは題詞に準ずるある語が、ただちに枕詞を歌中において伴うという意味で、それらの語と枕詞との關係は直接的であるということが出来る。ところが、この關係が間接的に作られている場合がある。これを第三の形式と称することにする。

○陸奥國より金を出せる詔書を賀く歌

葦原の 瑞穂の國を(中略)黄金かも たしけくあらむと 思はして 心悩ますに トリガナク 東の國の 陸奥の 小田なる 山に 黄金ありと(下略) 一巻十八、四四〇九

第一の形式や第二の形式では、

枕詞↓題詞

となるが、この歌では、

枕詞↓□↓題詞

となる(□印は一句を示す)。枕詞は一句をへだてて間接的に題詞の語に關連する。

つぎに示す四例は

枕詞↓□↓□↓題詞

となる場合である。例を多くとったのは、この形式の特徴を示そう

とするためである。

○足柄の坂を過ぎて死れる人を見て作る歌

(上略) 父母も妻をも 見むと 思ひつつ 行きけむ者はト、リガナク、東の國の 恐きや 神の御坂に 和膚の 衣寒らに(下略) 一巻九、一八〇〇

○檢税使大伴卿の、筑波山に登りし時の歌

コ、ロ、モ、デ、常陸の國 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り(下略) 一巻九、一七五三

○大伴坂上郎女、神を祭る歌

ヒ、サ、カ、タ、ハ、天の原より 生れ来たる 神の命 奥山の(下略) 一巻三、三七九

○葦屋処女の墓を過ぐる時に作る歌

(上略) 永き世の 語りにしつつ 後人の偲ひにせむと タ、マ、ホ、コ、ハ、道の辺近く 磐楯へ 作れる嫁を 天雲の(下略) 一巻九、一八〇一

右のうち後の二例は、一首中枕詞が現われるのがここだけであることを、注目すべきである。

つぎの例は

枕詞↓□↓□↓題詞

となる場合を示す。

○八日、白き大隅を詠む歌

(上略) いきどほる 心の中を 思ひ伸べ うれしびながら マ、ク、ラ、ツ、ク、 妻屋のうちに 鳥座結び 握あてそわが鯛ふ 真。白斑の鷹(卷十九、四一五四)



つぎの例では

枕詞 ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ 題詞

となつてゐる。

○勝鹿の真間娘子を詠む歌

トリガナク、吾妻の匡に、古に、ありける事と、今までに、絶えず言ひ来る、勝鹿の、真間の手兒奈が、(下略) | 卷九、一八

〇七

つぎの例は、

枕詞 ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ □ ↓ 題詞

となつてゐる。

○筑波岳に登りて、丹比真人国人の作る歌

トリガナク、東の匡に、高山は、多にあれども、朋神の、貴き

山の、蛭み立ちの、見が欲し山と、柿代より、人の言ひ継ぎ

国見する、筑羽の山を、冬ごもり、時じき時と、(下略) | 卷

三、三八二

この歌で、「トリガナク」は、「筑羽の山」の所在地「東の匡」を抽出する。それは「筑羽の山」を間接的に抽出していることでもある。「トリガナク」は歌中唯一の枕詞であることも注目している。

以上題詞と枕詞との連関の仕方を、三つの形式において認めただのであるが、一首は、これらの形式のうちの二以上をふくんで現われる場合がある。

つぎの例は、第一の形式と第二の形式のそれぞれ二回ずつからなっている。

○冬十月、難波の宮に幸しし時に、笠朝臣金村の作る歌

(第一の形式)

オシテル 難波の匡は

(第二の形式)

古りにし郷と

人皆の

思ひ息みて

つれも無く

ありし間に

ウミヲナス 長柄の宮

に

真木柱 太高敷きて

食国を 治めたまへば

味経の原に

ものふの 八十伴の男は

慮して

り旅にはあれども (卷六、九二八)

つぎは、第二の形式と第三の形式からなる例である。

村の作る歌

(第三の形式)

アシヒキノ、み山もさやに、落ち湧つ、吉野の川の、川の瀬の

清きを見れば

上辺には、千鳥数鳴き、下辺には、河蝦妻呼ぶ

モモシキノ、大宮人も

(下略) | 卷六、九二〇

つぎの例は、三形式すべて含んでいる。

○長皇子獵路の池にいでましし時、柿本朝臣人麿の作る歌

(第二の形式)

ヤスミシシ、わご大王

(第一の形式)

タカテラス、わが日の皇子の、馬並め

て、み獵立たせる

ワカコモヲ、獵路の小野に

(中略) ヒサカ

(第三の形式)

タノ、天見のごとく

マソカガミ、仰ぎて見れど

ハルクサノ

いやめづらしき

わが大王かも (卷三、二二九)

ところで、以上は、三つの形式を述べるのにきわめて少数の実例しか示すことができなかつたので、さらに、題詞の付された全歌数

のなかで、これらの形式がどのように現われるのか、左表によって数量的に示すことにする。表の作製にあたっては、題詞に作者名だけが示されるいわゆる「第一の類型」を除いた。主として枕詞との関係が生ずる「第三の類型」と、「第二の類型」にもまれに關係を持つものがあるのでその一部と、この両者を調査対象とした。或本等の歌で重複するものは省いた。なを枕詞の認定には論者により多少の差違が生じ得るから、表示の数字は必ずしも厳密なものとはいえないが、意図するところは、数的な厳密さにあるのではなく、題詞と枕詞との關係の大勢を、量的な形でつかもうとすることにある。

「表」

事項	数量
第二(一部)および第三の類型の題詞を付した長歌数	一七七
第一の形式の出現回数	四五
第二の形式の出現回数	六二
第三の形式の出現回数	二四

すでに見て来たように、一つの題詞のなかの一語、もしくは二語に枕詞が関連するのみならず、一語について、もしくは二語について枕詞が二回現われる場合などもあって、表に示す歌数と回数とは、数量の性格が異なる。したがって、出現回数の総歌数に対する割合を求めるとは、厳密には意味をなさない。しかしおおよそは、一語に一回の場合が多い。すなわち一首について一回である。

このような観点に立って、いちおうの割合を出してみることも、ま

ったく無意味ではないであろう。それは題詞と枕詞との関連性の密度、おおむねどの程度のかを暗示すると思われるからである。そこで三形式のそれぞれの出現回数を総歌数との割合においてみると、

第一の形式——二六パーセント

第二の形式——三五パーセント

第三の形式——一四パーセント

となる。けっきょく、すべての題詞のうちの七五パーセントが、枕詞に関連を持つことになるのであって、これは、題詞と枕詞との関連性の密度の、相対に高いことを示すものといえることができる。なお作品によっては、題詞を付しながら一首中にまったく枕詞を含まないものもあり、含んでいても題詞と没交渉のものもあるから、それらの作品を除いて考える場合には、この密度はいっそう高くなる。

三 結語——枕詞の抽出的機能

すでに指摘したように、第三の類型に属する題詞は、一首の中心核となるもの、発想の方处的、時間的契機、主題などを示す。ところが、このような性格をもつ題詞に対して、これも指摘したように枕詞が密接に関連しているのである。このことは言いかえるなら、題詞のなかのある語がいったん歌のなかに現われるとき、その語に枕詞が伴うということ、また、歌中の語が題詞中の語とまったく同一ではないが、意味上題詞の語にいちじるしい類縁性をもつようなものであるとき、そのような語に枕詞が伴うということなので

ある。これらの現象は、第三の類型の題詞の性格から考えて、枕詞が、一首の中心核なり発想契機なり主題なりを、一首のなかでとくにぬき出して示すはたらきをしていることを、ものがたるように思われる。ことに一首中枕詞が一回しか現れない歌で、その枕詞が題詞に関連する場合においては、このはたらきはいっせういちじろしく認められる。枕詞におけるこのような抽出的機能は、そのまま強意や強勢の機能ともなるわけである。たとえば一首の主想部が、枕詞によって抽出提示されるということは、そのまま主想部の内実の強調されることであり、声調的にはそこが強勢部位となることなのである。

すでに、「万葉長歌における枕詞の位相と機能」(前掲書)のなかで考察したように、枕詞の一首内での布置構造を手がかりにしてみる時には、枕詞には一種の句説法的機能の存在することがわかる。もちろんこれは、あくまで「一種」の句説法であって、世に言うものとは趣きを異にする。「一種」というのは、修辭的でもいうべき性格を意味する。それは、一首のなかである語が枕詞で装われることによって、その語を転機にして作品内実の流れが、あるときは小休止し、また促進され、あるいは新たな局面に転移するかと思うと大休止をもたらすなど、一首の流れの断続、曲折をリードするといういわば修辭的、文学的効果を主とした句説法なのである。ところが、題詞を手がかりとしてみることによって、枕詞には、修辭的句説法とはべつの側面のあることがわかる。抽出的機能と称したのがそれである。修辭的句説法に対してこれは、修辭的アクセント法とも称することをゆるされようか。説まれるという完全な記載文学というにはまだいくぶんの口誦性を保存しているか、もし

くはまったくの口誦歌であるといった万葉の作品にあっては、枕詞もまた、歌の口誦的性格にふかかかわっているのであって、枕詞における修辭的アクセントの機能も、ここにその発生の根拠があると考えられる。

(広島大学助教授)